

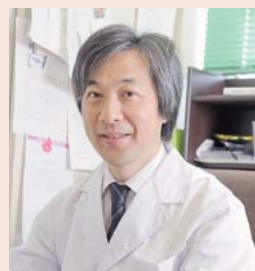


## ごあいさつ

平成25年に新しく開設された医療連携・総合相談センターも2年目を迎え、センターだよりも3号の発行となりました。

さて、国は団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に「どこに住んでいても、その人にとって適切な医療・介護サービスが受けられ、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最後まで続けることができる」よう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供されるしくみ「地域包括ケアシステムの構築」を打ち出しています。当院は特定機能病院ですので、国の示した枠組みの中では、高度急性期への医療資源の集中投入など入院医療強化に位置づけられ、救急や手術などの高度医療・超急性期の治療が終了したら、一般急性期・亜急性期・回復期リハビリテーション病院、患者さんの居住地の医療機関への早期転院や、十分に身体機能が回復しない状態での自宅退院が多くなっていくと予測されます。国の理念を実現し入院医療から在宅療養への円滑な移行を促進するためには、医療機関の連携部門と地域包括支援センターや居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションなど、在宅支援を担う機関の皆様との連携を密に、サービスのコーディネートがスムーズに行っていく必要があります。当院は、昭和25年に開院以来、938床の病床数と26診療科を抱える屈指の規模を誇る医科系大学の附属病院です。医師の育成と研究の他、多くの指定病院として道民の皆様の要望に応え、地域医療の発展に貢献し、遠隔地の多い本道における中核的医療機関としての使命を果たしております。

本号では、地域包括ケアシステム時代を見据え、在宅機関の皆様向けに、当院の理解を深めていただくと共に、お問い合わせの多い内容を盛り込んでおります。今後とも、連携の窓口にも、当センターの積極的なご利用のほどをお願いいたします。



医療連携・  
総合相談センター長

齋藤 豪

# 札幌医科大学附属病院はこんな病院です

当院は、医科系大学附属の総合病院として、昭和25年の開院以来、一貫して道民の皆様の健康増進と本道の医療・医学の発展に中心的役割を担う中で、厚生労働大臣から承認された**特定機能病院**として、医療資源をより有効に活用し良質な医療を効率的に提供するため、継続して地域等の医療機関で扱うことが難しい高度医療が必要な症例を扱うほか、

- ・高度救命救急センター
- ・災害拠点病院（基幹災害拠点病院）
- ・エイズ治療拠点病院（エイズ治療ブロック拠点病院）
- ・がん診療連携拠点病院
- ・肝疾患診療連携拠点病院 等 に指定されています。

最近の高度かつ先進的な治療としては、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」や画像診断と手術を融合した「ハイブリッド手術室」などの最新医療設備の導入、遺伝子診断に関する「臨床遺伝外来」の開設や脳梗塞・脊髄損傷患者に対する再生医療の治験など、先端的医療を展開しています。

また、教育研修の場として臨床教育や研究の中核的機能を有し、多くの優秀な医療人の育成や医師派遣により遠隔地の多い本道における地域医療の発展についても大きな役割を担っています。

## 数字で見る札幌医科大学附属病院の姿【平成25年度の統計から】

**設備面** ・面積 64,522㎡（参考 札幌ドーム建築面積：55,168㎡）

・許可病床数 938床（一般：890床、精神：42床、結核：6床）

**患者数** ・入院延患者数：286,528人 ・外来延患者数：478,930人 ・手術数：7,414人

**人員配置** ・医師：529人（研修医含） ・歯科医師：30人（研修医含） ・薬剤師：45人  
・看護師：832人（准看護師含） ・診療放射線技師：49人 ・管理栄養士：6人  
・事務員その他：269人 合計：1,760人

**公的医療機関への医師派遣** ・1,298件

## 附属病院の1日

**新規入院患者数**

**44.2人** \*一般入院



**1日平均入院患者数**

**785.0人**



**1日平均手術数**

**30.4件**

\*手術室



**1日平均外来患者数**

**1,962.8人**

\*複数科受診をカウント



**平均在院日数（一般）**

**16.9日**

\*入院期間のこと



# INFORMATION

地域の医療機関等との連携や特定機能病院として高度な急性期医療など、良質で満足度の高い医療サービスを提供できるよう、医療連携部門を組織化した「医療連携・総合相談センター」が発足して1年半が過ぎました。

今回は、更なる連携を推進するため、在宅ケア機関からお問い合わせが多い業務について紹介いたします。

## 【診療予約のしくみ】

○新患外来診療予約…医療連携係でお受けできる業務

医療機関からご紹介される患者さんについて新患外来の診療予約を受け付けています。

新患外来の診療予約を希望される場合は、当院のホームページ内の専用の書式「新患外来診療予約申込書」をダウンロードしてFAXによる予約（FAX受付時間：平日9：00～12：00、13：00～16：00）をお願いします。

なお、患者さんご本人からの申込みは受け付けておりません（臨床遺伝外来は除く）ので、現在受診されている医療機関にご相談の上、医療機関から申込みをしてください。

また、お電話、メールでの予約の申込みは、受け付けておりません。

**新患外来診療予約のウェブサイト** <http://web.sapmed.ac.jp/hospital/medical/mumhv60000002zmz.html>

担当 医療連携係 新患外来診療予約直通電話：011-688-9514

以下は、医療連携係ではお受けできない業務です。

### ○通常受診…医事係でお受けします。

当院は特定機能病院であるため、初診の患者さんで、他の病院等からの紹介状をお持ちではない場合は、初診料とは別に保険適用外の**初診時一部負担金(2,700円)**をご負担いただいております。

受診については、お電話、メールでの申込みは受け付けておりませんので、受診を希望される日(月曜日から金曜日・祝祭日を除く)の午前8:45~午前11:00までに直接、当院に来ていただき、受け付けをしてください。

担当 医事係:011-611-2111 内線 3162

### ○上記以外の診療予約…各診療科外来でお受けします。

- ・神経精神科:月曜日から金曜日(祝祭日を除く)の14時から16時までに代表電話 011-611-2111内線3533(神経精神科外来)に電話をして予約してください。
- ・もの忘れ外来:月曜日(祝祭日を除く)の16時から16時45分までに専用電話 011-611-3004に電話をして予約してください。なお、かかりつけの病院又はクリニックからの紹介状が必要となります。

### ○再来予約:同じ診療科で一年以内に受診がある場合…各診療科外来でご相談ください。

月曜日から金曜日(祝祭日を除く)の14時から16時までに代表電話 011-611-2111に電話をして、予約したい診療科の外来を呼び出し、ご相談ください。(再来とは:[例]第1内科での最終受診月が平成25年5月で、再度、第1内科を平成26年5月中に受診する場合は再来となります。)

### 【文書照会依頼について】…医事センター文書受付窓口でお受けします。

当院では、円滑な医療連携のため、他機関からの依頼により、当院で作成した公的機関へ提出済みの文書について、患者さんの了解が確認できる依頼書に基づき、医療機関等から文書の照会に対応しています。

### ○対象となる書類:照会の対象となる書類は次のとおりです。

- ・介護保険申請・更新に伴う「主治医意見書」
- ・身体障害者手帳の申請・更新に伴う「身体障害者診断書・意見書」
- ・年金受給者の再認定に伴う「診断書(障害者用)」

### ○照会方法について

文書の照会をする場合には、当院のホームページ内の専用の書式「文書照会依頼書」をダウンロードして、**医事センター文書受付窓口**あてに郵送をお願いします。

なお、メールでの受け付けは行っておりませんので、ご注意ください。

文書照会のウェブサイト <http://web.sapmed.ac.jp/hospital/medical/mumhv60000005ex3.html>

担当 医事センター文書受付窓口:011-611-2111 内線3204

### 【その他】

○神経内科の受診を希望される場合は、まず、お近くの医療機関で診察を受けられ、紹介状及びMRI、CTデータ等の検査資料を持参の上、来院してください。

○入院の依頼は、主治医から各診療科の病棟医長あてにご相談をお願いします。

○当日の予約、検査のみの予約、入転院の予約及び入院相談は受け付けておりませんのでご注意ください。

○当院に入通院している患者さんについての情報を、当センター経由でFAXされる際、個人情報漏洩等防止の観点からマスキングして送信する場合は、患者氏名等の確認のため、必ず送信後に電話をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 【当院の患者さん以外が利用可能な相談窓口】

当院は、エイズ治療拠点病院(エイズ治療ブロック拠点病院)、がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院の指定を受けており、当院の患者さんに限らず広く次の相談をお受けしております。

①HIV外来の診療予約に伴う相談(代表電話 011-611-2111・内科外来 内線3277、平日9:00~16:00)

HIV/AIDS診療を受診される方(初診の方)は、予め電話により受診日時の予約が必要です。HIVの知識を持った看護師が対応し、「検査を受けたい」、「検査で陽性といわれた」などの相談も含めて対応しています。

②がん相談(専用電話 011-688-9506、平日8:45~17:15)

がんの患者さんやご家族からの、療養や生活に関する心配ごと、社会制度の活用などについて、個別の相談に応じております。また、大学医学部寄付講座「アイン・ニトリ緩和医療学推進講座」と連携して、交流会、学習会なども開催しております。開催日時のお問い合わせはサロン事務局(専用電話 011-616-0234)にお願いします。

③肝疾患相談センター(専用電話 011-611-5700、平日8:45~17:30)

肝疾患についての個別相談、医療情報の提供を目的とした「肝臓病教室」、患者同士の交流の場としての「肝臓サロン」、多くの方に肝疾患を理解してもらうための「市民公開講座」等を開催しています。

## 在宅ケアのチ・カ・ラに感動！

—退院調整看護師になって感じること—

退院支援係 大谷 知寿（看護師）



平成25年度に医療連携・総合相談センターが開設し、退院支援係には看護師3名と社会福祉士1名が配置され、私は病棟看護師から退院調整看護師となり一年半が経ちました。

開設当初（平成25年4月）は1カ月に41件の依頼があり、うち在宅機関との調整は8件で、ほとんどが転院の調整でした。平成26年8月の依頼件数120件で、うち59件と半数が在宅機関や他医療機関との在宅医療調整となり、改めて在宅療養される患者さんの支援機関との情報共有と連携が、いかに必要かを実感しているところです。

当係が調整して訪問診療医等と退院時共同指導をおこなったのは未だ10件程度と少ない現状ですが、退院前カンファレンスでは、主治医、担当看護師を始め、在宅機関の皆さんと総勢10名で狭いカンファレンス室で顔を合わせ、各々の立場で患者さんの今後について熱く意見交換をしています。ケアマネージャーが来院しておこなう介護支援連携指導はこれまでに23件で、今後もさらに積極的に在宅機関の皆さんと顔が見える連携をとっていきたくと思っています。

看護師になって以来、ずっとベッドサイド看護に携わってきた私にとって、退院調整看護師の業務は驚きと発見の毎日です。この方法が一番良いと思ってやっていたケアは、実は在宅では応用が出来なかったり、絶対に無理だと思っていた方法は、逆に在宅では問題なく家族や在宅スタッフが力を合わせて出来るようになったり…。



先日担当したAさんは、入院中は原因不明の腰痛でリハビリが思うように進まないまま介護施設へ入所となりました。入院中はギョッパップさえ痛がり、一日のほとんどをベッド上で過ごされていましたが、入所先の施設担当者から「腰の痛みはほとんど訴えず、車椅子に乗車し元気に生活しています。」と経過報告を受けました。病院では検査やリハビリ、食事以外は生活の場がベッド上ですから、日中居眠りするの当然、そのうち腰だって痛くなりますよね。退

院後は自宅環境に近い施設において、その人らしく生活しているとのことに、私も病棟看護師も嬉しくなりました。

入院中に心因性の不安を抱え、呼吸苦しさを訴えて何時間も病棟看護師へ思いを伝えていたBさんには訪問看護を依頼しました。どうなっているのか心配しておりましたが、退院後に訪問看護師さんから「想定していた緊急コールなどはなく、とても落ち着いて自宅で生活できています。」との報告を受けました。また、当院での治療が困難と言われてもなお、酸素7ℓを吸入しながら大学病院の外来へ通院することを生きがいとしていたCさんには、訪問診療へ移行という形で調整をしました。Cさんからは、直接「いい先生を紹介してもらった。もうわざわざ医大に行くのは辞めるわ。」と感謝の連絡を頂き、当院の次回予約を自らキャンセルしたいとの申し出がありました。

思うようにいかないことがあるのはもちろんですが、思ったよりずっとうまくいっていることの方が多い気がします。「在宅の力ってすごい」と感動する瞬間です。

非日常である病院での生活では、安全・安楽に医療がおこなわれるのは当たり前です。医療や介護を必要とする生活者をどのように支えるかに視点を变えて、これからもより良い「医療」の為ではなく、より良い「生活」の為に何が出来るか、急性期病院の医師も看護師も積極的に考えなくてはならないと強く感じています。

退院のその先に続く患者さんの人生を思い描き、安心が継続されるような退院支援を目指し、今後とも在宅機関の皆様との連携窓口となれるよう努力をしていく所存ですので、退院支援係をご活用いただければと思います。



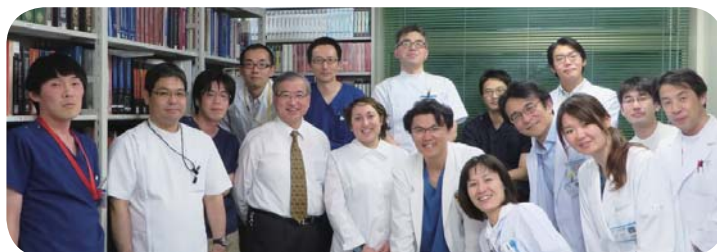
【看護師 大谷（左上）、奥山（右上）  
高橋（左下）、社会福祉士 本間（右下）】

## 生活を支えるためにチーム力を高める

— 神経内科医の立場から —

神経内科 助教 鈴木秀一郎（前列左から5番目）

神経内科が扱う病気は、おもに脳・脊髄・末梢神経・筋肉の病気になりますが、近年人口の高齢化と共に患者数が増加しています。具体的な病気としてはアルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症などの認知症疾患、パーキンソン病や他のパーキンソン症候群、多発性硬化症、重症筋無力症、ギラン・バレー症候群などの免疫介在性神経疾患、脳血管障害、筋疾患、末梢神経疾患、脳炎や髄膜炎などの中枢神経感染症、内科疾患に伴う神経疾患などを中心に診断と治療をおこなっています。



疾患を抱えた患者さんが少しでも無理なく在宅で安全・安楽に過ごしていけるように、また患者さんだけでなくご家族も笑顔で過ごせるようにサポートすることは、我々神経内科医の重要な役割だと考えています。

特に筋萎縮性側索硬化症や多系統萎縮症などの神経難病は、麻痺や失調などにより体を動かすことが日々できなくなっていくため、自宅で思い通りに生活することが困難となっていきます。生活を続けるためには胃瘻や喀痰の吸引、更には人工呼吸器などの医療処置を必要とすることも多いため、患者さんが自分らしく生活していく為のニードも十分に考慮された医療提供を受け、在宅で生活を送るためには、病院の医療スタッフによる支援だけは実現困難です。在宅医・訪問看護・訪問介護・ケアマネージャー等の皆さんとのチーム力を高めることが、患者さんが生きがいをもった生活を送る上で必要不可欠であると考えます。患者さん中心の生活を支える皆さんと良いチームが組めるよう、日々努力していきたいと思っています。当院では大学病院という性格上、主治医による急変時の対応やレスパイト目的の入院など、在宅で過ごす患者さんの要求に迅速に応えることが時に困難ですが、患者さんがどんな時にも良いチームのサポートを得て、自宅で安心して過ごせるように、チームの一員として情報共有を密に行い、より良い医療が提供出来る立場でありたいと考えています。

## 医療相談

相談係 社会福祉士 佐賀 良子

相談係は係長1名、医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）5名、肝疾患相談員1名、医療相談対策専門員1名の計8名が配置されています。入通院の患者さんが療養するにあたり、医療制度や福祉制度の手続き、地域のサービスの紹介、医療に関する心配事、経済的・精神的な問題など、様々なご相談に応じています。また、当院はがん診療連携拠点病院として、院内外のがん患者さんやその家族を対象にがん相談サロンの運営を行っています。平成26年4月～8月の1ヶ月平均の相談件数は800件を超えております。

患者さんが治療を継続しながら地域で生活する際、様々な困りごとが生じる場合があります。患者さんが治療に専念できるよう、主治医をはじめ医療スタッフ、行政、他医療機関、ケアマネージャー等、各関係機関と連携し、患者さんの抱える問題をひとつひとつ解決できるよう努めていきたいと思っております。



【上段左から、肝疾患相談員 藤岳、社会福祉士 當摩・木川・赤池 下段左から、社会福祉士 佐賀・田邑、係長 黒澤、医療相談対策専門員 大竹】

### < 関係機関の皆様へお願い >

相談係では、ソーシャルワーカーを個人および診療科担当制しておりません。継続した対応が必要な場合は、同じ者が対応することがあります。また、8：45～17：15の間は窓口に来所する方の対応をしており、ご相談をいただいてからお返事に時間を要する場合があります。ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどをお願いいたします。

## 札幌医科大学附属病院の理念

札幌医科大学附属病院は、患者さまに信頼、満足、安心していただける安全で質の高い医療を提供するとともに、高度な先端医療の研究・開発に取り組み、人間性豊かな優れた医療人の育成に努め、北海道の地域医療に貢献することを目的とします。

## 札幌医科大学附属病院の基本方針

- 1 医療サービスの向上を図り、患者さまに安全な医療を提供します。
- 2 患者さまの人権を尊重し、十分な説明と同意のもとに医療を行います。
- 3 国内外に評価される高度な診療や臨床研究を積極的に行います。
- 4 教育を重視し、人間性豊かで信頼される医療人を育成します。
- 5 地域との連携を密にし、地域における医療、保健、福祉を支援します。



## 「医療連携・総合相談センター」ウェブサイト

URL <http://web.sapmed.ac.jp/hospital/mpc/>



## 編集後記

入院治療が終了した時点で、退院困難な問題を抱えていても入院の継続は叶わず、自宅で療養する時代となりました。地域包括ケアシステムが提唱されておりますが、都市部を除けば、医療機関や介護サービスの地域間格差や、積雪が多く広大な地域特性を抱える北海道においては、課題はあまりにも大きいと感じます。その間隙を埋めるための一つは、地域毎に切れ目のない医療と介護の連携を推進していくことです。当院は、地域医療への貢献を建学の精神とする大学病院であり、特定機能病院としての役割発揮を期待されています。患者さんは札幌市内及び近郊区が3/4を占めますが、1/4は全国各地、道外、海外からのご利用です。今回、初めての試みとして、北海道内の在宅ケア機関向けに広報誌を発行いたしました。訪問看護ステーションの配布先の選定では、北海道訪問看護ステーション連絡協議会様の多大なご協力をいただきました。まずは、当院の医療機能や連携部門のしくみについて広く知っていただくことで、皆様の連携業務の一助になれば幸いです。

(退院調整看護師 高橋由美子)

## 札幌医科大学附属病院 医療連携・総合相談センター

札幌市中央区南1条西16丁目 TEL: 011-611-2111 (代表) FAX: 011-621-2233

患者サービス係 (内線3188) 医療連携係 (内線5121) 栄養管理係 (内線3153)  
個人情報開示 (内線3194) 退院支援係 (内線3193) 給食管理 (内線3155)  
相談係 (内線3189) がん看護相談室 (内線5116)